



Title	沖縄の歴史について : 私たちがともに笑いあう未来のために
Author(s)	
Citation	令和5 (2023) 年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書. 2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95148
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和5年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	すずきりゅうのすけ 鈴木龍之介	学部 学科	文学部人文学科	学年	1年
ふりがな 共同 研究者氏名	さくらいけん 櫻井建	学部 学科	文学部人文学科	学年	1年
	さえきひかる 佐伯光琉		文学部人文学科		1年
					年
アドバイザー教員 氏名	伴瀬明美 教授	所属	人文学研究科		
研究課題名	沖縄の歴史について ～私たちがともに笑いあう未来のために～				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
【研究の目的・方法と経過の概要】					
<p>本研究は、研究課題を「沖縄の歴史について ～私たちがともに笑いあう未来のために～」とし、沖縄史上において、現在の日本人が日本政府・九州以北（いわゆる「本土」「内地」）の日本人の行動に対し持っている意識と、同時に日本人が沖縄県に対して持っている美しく魅力的な観光地としての視線とのギャップの中で、本質的な沖縄史、ひいては沖縄そのもののあり方についての研究を進めるものであった。しかし、研究の中心として沖縄戦に関わる戦争史の事実と意識の確認を据え、現地調査と併行して文献資料を読んでいく中で、いわゆる「内地」における沖縄史・近代戦争史の理解とその表現は、その形式が小説やエッセイ、政治家による対談など多岐に渡り、『内地』の意識」と一括りにするには複雑な立場や姿勢を孕んでいることに気づいた。そこで、学校教育の中でなされていた戦争教育での表現と、インタビューや調査で得られた資料の表現から受ける印象との差異が目立っていることに着目し、本研究は教科書等に見られる「沖縄戦」の記述と、現地調査で得られた体験との比較とその意義の検討を中心に研究成果を纏めることとした。なお、それに伴って研究成果としての論文題目を「まとまらなさ」の緊迫感：現場で沖縄戦を学習する」と研究課題名とは異なるものに改めている。</p> <p>本研究は、文献研究と沖縄県実地における資料館・公園等の訪問と沖縄戦の経験者に対するインタビューを含めた調査を併行して進めた。文献研究については沖縄や第二次世界大戦・太平洋戦争に関する研究者・政治家の著書から得られた知識を前提として、教科書・新書等の分析を中心に行った。現地調査では、沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館などを訪問したことに加え、沖縄戦経験者へのインタビューを行い、調査の中で受けた印象の分析を行い、現地調査前後で得られた資料との比較を行った。以下に現地調査のスケジュールを記載する。</p> <p>2023年9月13日 大阪府（関西国際空港）から沖縄県（那覇空港）へ移動。現地調査開始。 2023年9月14日 平和祈念公園・沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館を訪問。</p>					

2023年9月15日 沖縄県公文書館を訪問。

2023年9月16日 豊見城市において沖縄戦体験者のHさんに対するインタビューを実施。沖縄県(那覇空港)から大阪府(関西国際空港)へ移動。実地調査終了。

【研究成果】

沖縄戦を現地で学ぶ意義について、実地調査と書籍での学習との比較から行った研究成果について題目を「まとまらなさ」の緊迫感：現場で沖縄戦を学習する」とする論文にまとめ、以下にその全文を記載する。

はじめに

大学受験のために予備校の授業で日本史の科目を取っていると、琉球・沖縄史の単元において、日本政府や九州以北の人間がかつて沖縄に対して悪逆非道の数々を働いており、沖縄の人々は皆九州以北の人々を嫌っているという内容が語られた。対して、多くの日本人にとって、沖縄のイメージには、美しく自然豊かで、優しく朗らかな人々の住む観光地としての、全くポジティブであり魅力的なものが先行していてもいる。戦時下には唯一の民間人を巻き込んだ地上戦が行われ、戦後には米国による統治があり、現在にもアメリカ軍の軍事基地が置かれる沖縄に対して、このように過度なまでにポジティブであったりネガティブであったりするような意識を持つてしまうことには、歴史認識のみならず、国際環境に対する考察をもゆがめてしまう危うさがある。ここで必要とされるのは、「沖縄戦」と、近現代史における沖縄と日本との関係について、何をどのように認識し、語り継いでいくべきかを明らかにすることである。

沖縄は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が残る現在でも1年に26万人ほどの修学旅行生が訪れる¹、平和学習の地としてとても重要な位置を占める土地である。この沖縄での修学旅行生による平和学習では、「戦争体験者が自身の体験を直接語る「講話」とともに、ボランティアの一般市民や退職教員から成る地元の平和ガイドの継承活動が大きな役割を果たしてきた」²が、高齢化が進み、戦争体験者からの話を聞く機会が失われつつある今日では、修学旅行生のみならず、日本人の多くにとってそのリアリティを孕んだ沖縄の姿を認識することは難しくなっている。「知識の有無を問われる筆記テストや受験制度に伴った、「暗記科目」という根強い強化像」³のある、社会科目としての「日本史」における琉球・沖縄史学習においてはなおさらであろう。日本と沖縄の戦時下における関係については、住民の集団自決に関し、高校教科書の検定にあたって「日本軍によって強制された、あるいは追い込まれたという叙述に対して、「沖縄戦の実態について、誤解するおそれのある表現である」という検定意見が付けられて修正させられた」⁴という「教科書検定問題」についても多くの議論がなされ、学校教育の文脈においても多くの疑問点が浮かび上がってきている。

平和学習の中心が修学旅行であるように、沖縄に直接赴き、戦跡や資料館を訪ねることには書籍や映像等によって知識を得る形の歴史学習とは異なる効果が期待されていると言える。そこで本研究では、「沖縄戦」の歴史認識に着目した上で、沖縄やその人々のあり方について改めて明らかにすることを目的とし、各種書籍における沖縄戦の記述を見た上で、沖縄現地で得ることのできる、緊迫感を伴って語り継がれる沖縄と沖縄戦の姿について記述した。

1. 沖縄戦と歴史認識をめぐる問題の検討

「沖縄戦」と教科書の関係について活発に議論が交わされる契機となったのは、2007年3月末に起こった「教科書検定問題」である。これは、2008年度から使用される高校教科書の検定において、沖縄戦における住民の「集団自決」が日本軍によって強制されたという記述から「日本軍」という主語が削除されたことに端を発する。大城（2007）が、この議論の論点が自決は「軍命」であったか、隊長命令が行われていたのか、という部分に絞られたことに対し、「集団自決」が発生したことの背景をなす構造的な要素を捉え、沖縄戦の本質として「検定問題」を検討するべきであるとの主張⁵を行うなど、この議論は教科書の表現そのものの意義や解釈ではなく、政治的な立場や意図を論じる方向に強く発展していった一方で、教科書の記述が与える学習上の効果など、「沖縄戦」の記述について教科書・学習用図書そのものの役割や力に関する議論はほとんど発展していないといえる。

「沖縄戦」記述に関する分析は無いものの、寺岡（2018）は「原爆問題」について教科書上の記述の分析を行っている。ここで寺岡は多くの教科書について縦断的・横断的な視点の両方において検討しており、1953年から2015年までの教科書について慎重で解釈や判断の余地が生じないような言葉選びが行われてきた⁶ことや、2015年時点で使用されている中学校社会科の教科書について、どの教科書会社においても300ページ程度の分量で通史的に歴史を収めなくてはならない制約の中で、原爆問題について漏れなく記述することの難しさを指摘し、「ほかの歴史的事象も同様である」としている⁷。ここで寺岡は、やはり戦争体験世代の減少と社会に新たに出現してきたテロ事件や環境問題の存在などを踏まえた視点から「被爆体験や戦争体験の継承を掲げるだけでは、平和教育はもはや存在意義を見出すことができない」と述べ、「被爆者や戦争体験世代が身近にいないかぎり、「原爆の記憶」や「戦争の記憶」が日常的に若い世代にほとんど伝承されないとと言っても過言ではない」現在に、「原爆の語り」をどのように「更新」できるかを考えなくてはならないとしている。加えて結びには、「学力重視の流れの中で平和を学ぶ時間も限られてくる」と現代社会で取り沙汰される社会科学学習の問題にも触れている⁸。この問題意識は、そのまま「沖縄戦」の語りと教科書記述にも重ねることができるだろう。

ところで、教科書を中心とした書籍による「沖縄戦」の議論が「検定問題」に偏っている一方で、小学校から高等学校までにおける平和学習としての修学旅行を中心とした実地での学習や、語り継がれていく琉球・沖縄史や沖縄戦の認識と理解の意義や展望についても多くの議論がなされている。吉田（2019）は、とくに修学旅行生を対象とする沖縄戦の継承について、戦争体験者の生きた言葉が失われつつある中で、とくに若い時代が行う平和教育活動に着目して「沖縄戦を学ぶ」ことから「沖縄戦から学ぶ」ことへ目的を転換することをポイントとした。当時のできごとに直接リアリティを伴って聴くことのできる体験者の証言を聴くことができなくなる時代においても、敬遠したり、思考停止に陥ったりしがちな戦争や「沖縄戦」に関する議論を再考し自身の生活とのつながりを意識する機会としての平和学習を捉えた⁹。また、同じように時代背景を捉えた口承による語り継ぎについては、門野（2013）などが文学研究の立場から再考している。門野は、沖縄戦の伝え方を公的資料や軍記による「第一の声」、住民の証言や体験者の次の世代による「継承者たちの声」を指す「第二の声」と時系列順にまとめた上で、時空を超えて襲来する沖縄戦の死者そのものの声として現れる幽霊の存在を「第三の声」となる新たな可能性として指摘¹⁰し、「幽霊からの呼びかけは、他者の経験（たとえば戦争や差別の経験）を聞くのとは違い、身に危険を感じるほどの切迫感を持ち、「幽霊と出会った者は、幽

霊の要求に巻き込まれる形で個人の行動を変換する手助けを受けるとし、また噂話として共有される幽霊は、他者に伝播して何かを伝えてゆく中で、私的な経験を公的な記憶に拓いていく力にもなると指摘¹¹している。ここで吉田と門野に共通した視点として見られるのは、ともに「第二の声」のうち体験者の証言にある意義を、一方は「継承者たちの声」の中にも生まれる「生のリアリティ」、一方は恐怖や身の危険に伴った「切迫感」という形で他の「声」に再現・再発見しようとしている姿勢であろう。

以上を見ると、1)教科書学習と2)修学旅行などによる(文献としても表される口承・証言の語り継ぎを含めた)実地での学習の二面において、それぞれ以下のことが指摘できる。

(1)「沖縄戦」について現在記述されている教科書・学習用図書の分析は不足している。また、少なくとも「原爆問題」の記述については、教科書の特性上生まれる文量や表記の制約から、その事象について網羅的な記述を行ったり、解釈・判断の余地を多分に残したりすることは難しく、慎重な記述が行われている。それは「沖縄戦」を含めた「ほかの歴史的事象」についても同様であるように考えられる。

(2)体験者の証言にある「リアリティ」とは、「沖縄戦から学ぶ」視点の転換に関連する「自身の生活とのつながりの意識」や、幽霊を通した身の危険を感じるほどの「切迫感」といった形で現れうるものである。

以上2点を踏まえ、本研究では、第2節において、網羅的な記述が行われていないと予想できる高校教科書に加え、同時に網羅的記述や解釈の余地が含まれうる一般の学習用書籍2冊についての分析を行い、その特徴と意義について検討する。その後第3節において2023年に沖縄実地で行った調査(資料館の訪問・体験者へのインタビュー)から得られた実地における平和学習の意義について考察し、平和学習において重要視されてきた、実地での体験に根付いている「リアリティ」の本質について再考する。

2. 教科書における沖縄戦史とその特性

学習用の教科書類の分析対象として、全国的に高校の社会科で用いられている日本史教科書『詳説日本史 改訂版』(山川出版社)に加え、琉球・沖縄史や沖縄戦に焦点の当たった一般向け・学習用の書籍類として、新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史(改訂版)』(東洋企画)、吉浜忍、林博史、吉川由紀編『沖縄戦を知る事典』(吉川弘文館)についても分析した後、書籍での学習から共通して・書籍それぞれの特性によって違って得られるものの双方について考察する。

2.1 高校教科書のまとめる沖縄戦

高校の社会科教科書として、「日本史B」の学習用として山川出版社より発行され『詳説 日本史』を対象に分析する。なお、分析対象を本書としたのは「日本史B」学習用教科書のうち東京都内での選定が最多であったからである。

『詳説 日本史』のうち、本文にある沖縄戦についての記述は、

翌1945(昭和20)年3月に硫黄島を占領したアメリカ軍は、4月にはついに沖縄本島に上陸し、島民を巻き込む3ヶ月近い戦いの末これを占領した(沖縄戦)。(太字原文)

の1文¹²に留まっており、「島民を巻き込む3ヶ月近い戦い」の詳細については、同ページのコラム欄

において

沖縄本島の中部に上陸したアメリカ軍は、付近の二つの飛行場を制圧し、島を南北に分断した。この間、日本軍は特攻機を投入した航空総攻撃をおこなったが、アメリカ艦隊を沖縄海域から撃退することはできなかった。沖縄を守備していた日本軍は、アメリカ軍を内陸に引き込んで反撃をする持久戦態勢をとったため、島民を巻き込んでの激しい地上戦となり、「集団自決」に追い込まれた人びとも含めおびただしい数の犠牲者を出し、6月23日、組織的な戦闘は終了した。沖縄県援護課の資料によれば、死者は軍民合わせて18万人余りにのぼった。

との記述¹³で示されている。本文中の「沖縄戦」記述量の少なさに加えて特筆すべきは、1節において寺岡(2018)の指摘した「原爆問題」記述の特徴にも重なる、地上戦の詳細を短いながらに示したコラム欄の中立を保とうとする姿勢であろう。当時の戦闘員や民間人の体験談を盛り込むこともなく、また6月23日の組織的戦闘の終了が牛島満中将・長勇参謀長の自決を切掛けとしたことや、7月2日の米軍によって沖縄作戦終了が宣言される前後になお戦場であった沖縄の姿についてなどにもほとんど言及していない。同時に、これらの記述に不正確であるところや、独自の見解に基づいていると思われるところはほとんど見られず、本史を通史的に学ぶことを目的としている高校教科書に向けた表現としてよくまとめることを目的の中心に据えていることが察せられる造りになっていると言える。たとえば4月の沖縄本島への上陸を基準に「3ヶ月近い戦いの末占領した」と記述することには6月23日から7月2日(あるいはそれ以後)の間の組織的戦闘ではない「戦い」の存在を仄めかしているようにも、意図的に削除しているようにも取りがたい、不明瞭でなまま解釈・判断の余地を排除したうまい記述であると言える。全体を見ても、その言葉遣いも非常に慎重で、かつ通史的な歴史学習全体の意義の中で取られた比重の中での記述として、平和学習とは離れた文脈においてよくまとまっていると言えるだろう。

2.2 網羅的な記述における沖縄戦の表現

沖縄戦について、高校の学習用図書に比べて網羅的な記述を持つ書籍として、新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』、吉浜忍、林博史、吉川由紀編『沖縄戦を知る事典』の2冊を対象として記述の分析を行う。なお、『琉球・沖縄史』は、新城が琉球・沖縄史を学ぶ目的を「抽象・一般的な概念でまとめられた歴史像に、地域のより具体的に掘り下げられた歴史事象を照らし合わせることによって歴史の本質にせまるという、歴史観を培うこと」¹⁴としており「まとめられた歴史像」のモデルとなる高校教科書との比較に適していると判断できたこと、『沖縄戦を知る事典』は、執筆者の全員が戦後生まれで、サブタイトルにもなっている「非体験世代が語り継ぐ」ことを重要視しており第1節での先行研究の検討の下での分析が期待されたことがそれぞれ分析対象となった理由である。

『琉球・沖縄史』では、沖縄戦について非常に詳細な記述がなされており、『詳説 日本史』では記述のなかった北部での戦闘の記録、中部での激戦、6月23日以降の悲惨な虐殺、米軍により沖縄作戦終了が宣言された7月2日以降も戦い続けた部隊の存在などが記述されている¹⁵。また、沖縄戦そのものに対する解釈や周辺にある問題などについても、本文に加え、数多くのコラム欄においても説明と考察がなされている。「沖縄戦はなぜおこったのか」を第7章4節において18ページもの長さで記述¹⁶した後に「沖縄戦から何を学ぶか」と題した5節でも12ページもの解説を行って¹⁷おり、沖縄戦が起こった事実そのもの以上に、その歴史を辿ることとなった背景と、現在の我々にとって沖縄戦が

どのような存在であるのかを多岐にわたる視点から詳細かつ整理された状態でまとめたものであるといえる。特に解釈・判断の余地を残そうとしなかった『詳説 日本史』に対し、本書は、「悲惨な最期をとげた」女子生徒¹⁸、「鉄の暴風が荒れ狂う阿鼻叫喚の巷と化した」南部戦線¹⁹、というような主観的で情感のこもる表現を伴った説明が多く見られた他、以下のように明確な立場・意見の表明も数多くあった。

沖縄戦では、日本軍は住民を守るどころか、食料を奪ったり、壕から追い出したり（中略）残虐な行為をおこなったことがよく知られている。しかし、（中略）住民が自決しようとするのをやめさせたり、米軍の捕虜になるよう勧めたりした将兵がいたことも事実である。（中略）自らの保身のみで、命をながらえた人もいただろうが、人が人でなくなる残虐な戦場にあっても、状況を冷静に判断し行動する人はいるものである。たとえ、どんな最悪な事態に陥ろうと、絶望ではなく、「生きる」希望をみいだそうとする強い意思を持ち続けることが大切ではないだろうか。²⁰

これを見ると、本書はやはり高校教科書とは全く違う、平和学習に近い文脈での役割を意識した記述となっていることがわかる。単に日本史や沖縄史について知識をつけるのではなく、本節ではより「沖縄戦から学ぶ」ことを意識しているのである。

次に、『沖縄戦を知る事典』は、より「証言」を重要視して書かれた形になっている。史実と証言を擦り合わせるような形式で進んでゆき、重傷を負った兵士の「処分」の実態や、日本軍が「鬼畜米英」について不正確な情報を流し、捕虜になることも禁じていたことなどが目立って述べられている²¹。同時に「証言」によって『琉球・沖縄史』で触れられた、「自決を止めたり、米軍の捕虜になることを勧めたりした兵士」の存在も以下のように触れられる。

六月四日、解散命令を言い渡された。親友の千代ちゃんとガマを出たが、どこに行けばいいのかわからずにいると、南へと歩く避難民の列を見つけた。後ろについて行き、摩文仁海岸へ着いた。そこでは激しい砲爆撃にさらされ、周りではたくさんの人が亡くなり、自決する人もいた。あまりの恐ろしさに「自決しよう！」と言った。すると千代ちゃんが「絶対いや！ 絶対死にたくない！」と言ったので思いとどまり、摩文仁から与那原へ移動した。与那原で出会った日本兵に、佐敷は収容所になっていると聞いた。私たちの出身地域だと伝えると、「君たちは非戦闘員だから自決することはない。夜は危ないから昼、佐敷まで歩いていきなさい」と言われた。言われた通り行くと、すぐ米兵に見つかり収容所に行った。しばらくは何もする気が起きなかったが、近所の子供たちの面倒を見ているうちに、次第に元気を取り戻した。²²

「証言」の形式を取るこのような文章には、実地での学習に期待される「リアリティ」とも近い、感情を揺さぶるような表現がたくさんある。たとえば恐ろしさから「自決しよう！」と言ってしまう証言者に対して「絶対いや！」と自決を拒む「千代ちゃん」の会話には迫りくる生死の問題を読み手にも実感を伴って読み取ることができるし、「何もする気が起きなかった」が、「子供たちの面倒を見ているうちに、次第に元気を取り戻した」という個人の体験に終始する感情の動きにも「リアリティ」があるように感じられる。

特筆できるのは、こういった証言と年号や犠牲者数などの数字を伴う史実の説明がどちらも何度も繰り返されている点である。「個別の具体的な事例を豊富に盛り込ん」で、「沖縄戦の実相にたどり着

けるように構成し」た²³という本書なりのまとめ方を用いて、「沖縄戦を知る」ということを表したといえよう。

2.3 平和学習において書籍の持つ意義と特性

以上に分析してきた3冊について、「沖縄戦」に関して共通して触れられていた事項は、それが地域住民を巻きこんだ地上戦となったことであろう。『詳説 日本史』は「島民を巻き込む(中略)戦い」とシンプルな表記にとどまっているのに対し、『琉球・沖縄史』では「国内唯一の地上戦」と沖縄戦が表現される誤りの指摘に関連した議論を独立して立項している²⁴うえ、『沖縄戦を知る事典』はそもそも巻き込まれた島民自身の体験の記述や証言を載せるという形式を取っているという違いはあるものの、歴史的事象としての沖縄戦を捉えるうえで、巻き込まれた民間人の存在は避けられないものであるという認識は理解できる。

個々の特徴について考えると、『詳説 日本史』は寺岡(2018)と同じく、通史を振り返るうえでのいち歴史的事象としての「沖縄戦」を制限の中で記述した結果として、さまざまな事実や情報が不足した形で叙述されてしまったことは否定できない。しかしその姿勢や慎重な表現の結果として、端的にうまくまとめた全体の記述が現れていることは、高校の学習用教科書であることの特徴であると言えるだろう。

そして、沖縄・沖縄戦に焦点を当てて網羅的に記した2冊の優れた詳細さについてはその豊富なコラムや立項数²⁵からも明らかである。沖縄戦そのものの統計的な情報だけにとどまらず、体験者、歴史研究者の立場や考え方をすることを目的としても、包括的かつ詳細に必要な情報を得ることができるようになっていると言えるだろう。特に『沖縄戦を知る事典』については、編者の意図した通り、個別の豊富な事例が史実の説明と対応して並べられており、非常に幅広い視点から沖縄戦を捉えることを可能にしているといえる。沖縄戦について詳しく、周辺の問題までカバーされた十分な知識をつけるのは、こういった書籍に当たることで十分に可能であるのだろう。他の2冊ほどシンプルにまとめて読みやすい記述ではないかもしれないが、証言も各執筆者によって整理され、体験者の実感を失わないままに丁寧に叙述が続いているといえる。

3. 沖縄県実地で感じ受けることのできる「緊迫した『沖縄戦』」

沖縄県の実地調査では、(1)資料館(沖縄県平和祈念資料館、ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館)の訪問、(2)沖縄県公文書館の訪問、(3)沖縄戦体験者(豊見城市在住)へのインタビューを行った。本節では(1)と(3)での調査の結果を中心にまとめ、4節において本研究全体の考察とまとめとして、教科書をはじめとした書籍での学習に対して、実地での学習・体験で捉えることのできる沖縄の姿についてまとめる。

3.1 平和祈念資料館における展示

平和祈念資料館とひめゆりの塔は、沖縄戦でも激戦地であった最南部に位置している。これら2つの資料館²⁶は、常設展示の前半には当時の物的資料や文献資料を基に戦時の歴史をなぞっていき、後半に実際の戦争経験者の方々が自身の体験を語った文章を展示しているという点で共通していた。特に戦史の展示において比重を置かれていたのが、6月23日の牛島満中将・長勇参謀長自決後の沖縄南部に関する説明である。6月23日は一般的には沖縄戦の終戦とされ、追悼式も行われている日付である

が、その以後の様子を多く語る展示の様子からは、軍民入り乱れての惨状となった沖縄戦の最終盤について特に来場者に伝えたいという意図が感じられる。また、さらに共通していたのは、実際に戦地に赴いて命を落とした方の名前を確認することができるという点である。平和祈念資料館では資料館のある平和祈念公園内の石碑「平和の礎」に、沖縄戦における死者の名前が出身都道府県別に記されている。沖縄戦の犠牲者となった人々は自分たちの身近な場所にもいたということ意識することで沖縄戦をより近くに感じることができる造りになっており、実際に県外から訪れた私たちにとっても戦地としての沖縄が意識しやすくなった。一方、ひめゆり平和祈念資料館では、展示後半の部屋に、ひめゆり学徒隊の死者をそれぞれの名前だけでなく顔写真や紹介文を伴って表示する形式をとって展示が行われており（図1）、名前・顔・人となりという連続した情報が狭い部屋の中で私たちに押し寄せてくるのが犠牲となった人々の最期をよりリアリティをもって感じるようになるものであった。



図1 ひめゆり平和祈念資料館の展示（公式HP²⁷より、撮影者・撮影日時不明）

3.2 インタビュー

実地調査中に、筆者の知り合いであり、沖縄戦の当時から現在まで那覇市の南に位置する豊見城市嘉数に住んでおり、避難の際にも激戦地であった糸満の方面へと向かい生き残った戦争体験者のHさんに対してインタビューを行った。打ち合わせにおいてHさんは現在高齢であることからうまく話すことができないと伺っていたが、以前にも戦争体験を話された経験もあるとのことで、話しはじめると事細かに経験を話してくださった。ここでは、インタビュー全体の内容を以下に簡単にまとめて示す²⁸。

沖縄戦当時10代後半であったHさんにとって、戦争に対する危機感は1944年10月10日に起こった那覇空襲まではあまりなかったという。しかし、那覇空襲以降は沖縄県内に戦争への危機感が広がり、山がちな地形である嘉数においては、家ごとに壕を掘って避難に備えていたそうである。戦線が南下した際には、周りの家が避難を始める中でHさんの母が亡くなり、埋葬をするために避難が遅れてしまったという。埋葬をするにも本格的にはできず仮に埋めるだけしかできなかった、家から持ち物を持っていくことはできず、今ではどうやって生き延びたか分からないほどの極限の状態に逃げた、等、戦火が迫り余裕のない状況がうかがえた。多くの人が路上で亡くなっている中を南に向

かって逃げていったという H さんは、その時の様子を「沖縄の大きな蛆が沸く死体の上を歩いて行った」と語り、沖縄戦の転換点ともなった牛島満中将の自決についても、逃げていた最中に耳に入ってきたと言っていた。

また H さんはお話の中で、中部や北部に逃げることができた人たちは比較的多くの人が生き残っているとも言っていた²⁹。

最終的には逃げる場所がなくなって米軍に捕まったという H さんは収容所に入り、しばらくは自力で食べ物を調達して生活し、終戦についても捕虜になってから聞かされた。その後、親戚がいる者についてはそちらに移るよう聞かされ、H さんも知念にいる親戚のもとへ向かった。

戦後に沖縄戦の映画を見た際には、その様子は実際のものとはまるで違っており、実際の戦場の方がはるかに酷かったという。

インタビュー中、H さんは、インタビュー当時のウクライナ・ロシアの情勢を鑑みながらも、しきりに戦争が無くなり、世界中で仲良くすれば良いと発言していた。あらかじめ用意された話があるわけではない、私たちとの対話の中で思い起こされ、浮かび上がってきた、すさまじい戦場となった沖縄の姿には迫るものがあり、資料館での展示で受けた衝撃以上に、H さんの、私たちに経験し、体験したことを伝えようという緊迫感と願いが伴っていたように感じられた。

4. 考察とまとめ

ここまで、教科書や書籍に見られる沖縄戦の姿を分析した後に、実地調査で認識した沖縄と沖縄戦について記述してきた。沖縄実地で得られた知識や経験と、第2節で分析してきた文献から得られる沖縄戦の姿との最も大きな違いは、実地で体験するかたちで得られる知識や感慨は誰によってもまとめられていないものであるということである。

『詳説 世界史』は、前述の通り、日本史の通史を学習する中で必要とされるシンプルな知識としての「沖縄戦」を、明確かつシンプルにまとめていた。『琉球・沖縄史』からは、沖縄戦に関するものに限っても、実地調査でかけるよりはるかに短い時間で、詳細でかつ多くのことを知り、学ぶことができるはずである。一方で、そこに先行研究で指摘されていた「自身の生活とのつながりの意識」や、「切迫感」のようなものを見出すことはほとんど不可能である。

対して、私たちが訪れた資料館においては、どの情報を選び取って認識し、知識や経験・体験として蓄えていくかは私たちにその大部分が委ねられる。「平和の礎」ではどうしても自身の出身地について刻まれた死者の名前が気になってしまったり、沖縄県平和祈念資料館・ひめゆり平和祈念資料館両方で読んだり聴いたりすることのできる「証言」は、そのすべてを覚えたり、一般化したりしてしまったりは難しい。『沖縄戦を知る事典』に示されていた「証言」からは、記載された体験者の生の声に近いものから切迫感や「つながり」を感じるができそうであるが、『知る事典』とは異なって、両資料館は歴史的事実やその流れを展示の初めに示したのち、「証言」や犠牲者の姿を示す展示はそれぞれ単体で独立した展示後半の部屋で行っており、史実と「証言」が伴ってトピックごとに整理された『知る事典』による学習とはやはり異なっており、展示による学習はどの書籍と比べてもはるかに「まとまっていない」といえる。しかし、展示されている犠牲者の写真を見たり、名前を追ったりしながら、狭く暗い部屋の中や、あるいは公園で沖縄の気温を感じている中での学習を余儀なくされていると、現地の人々の「語り継ごう」という意志が視覚的にも訴えかけられ、ある一言や、一人の証言、犠牲

者の名前が強く印象に残ることがある。あるいは、沖縄戦の体験者の「講和」やインタビューを通じた対話は、『沖縄戦を知る事典』にまとめられたような筆者・编者らによる発言や項目ごとの整理・引用を追う形ではない、体験者個人の記憶の中に浮かび上がってくる戦場の姿をはっきり聴き手に認識させる。

このような、まとめて情報を得ることが難しいからこそその緊迫感と臨場感が、現地に学習に訪れた人々に強いインパクトと「リアリティ」をもたらし、修学旅行のような実地での平和学習に大きな意義を与えているのではないだろうか。

おわりに

本稿では、沖縄と沖縄戦の歴史認識を捉えなおすという動機から出発して、文献による歴史学習・平和学習と、沖縄県実地を訪れることによる歴史・平和学習との間で得られるものの違いについて論じた。詳細に、得るべき情報をはっきり得るために文章での学習は効果的だが、一方で、そのように誰かの手によってまとめられていないからこそその衝撃と緊迫感による、私たちの生活に訴えかける「リアリティ」が実地での学習には存在した。

しかし、先行研究でも数多く論じられてきたことを確認したように、今や戦争を直接体験した世代の生きた言葉は失われつつあり、たとえば今回の調査で行ったような戦争体験者へのインタビュー等を行うことはさらに難しくなっている。「まとまっていないからこそその緊迫感」を、戦争を体験していない世代によって語り継がれた言葉によっても保つことができるのか、ということについては今後の課題となるだろう。また、実地で戦争体験を学んだり、見聞きしたりしたときの「リアリティ」の緊迫感と自身の生活との「つながり」は本当に文献に立ち上がらせ、沖縄県を訪れずとも得られるようにはできないのか、ということについても再考の余地がありそうである。

注・引用文献

- 1 沖縄県観光政策課「令和4年度修学旅行入込状況調査結果について」『沖縄県』, <https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/14737.html> (2023), 1.
- 2 吉田直子「沖縄戦から何を学び、何を語り継ぐのか: 沖縄戦の記憶の継承活動にかかわる戦後世代の語りからの示唆」『東京大学大学院教育学研究科紀要』58巻 (2019), 179.
- 3 戸田靖久「アンケート調査から見た社会科系教職科目受講生の意識と社会科教育法の課題」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』23巻 (2015), 181.
- 4 林博史「沖縄戦における「集団自決」と教科書検定」『現代史研究』53巻 (2007), 65.
- 5 大城将保『沖縄戦の真実と歪曲』(高文研, 2007), 74-75.
- 6 寺岡聖豪「歴史教科書の中の原爆問題」『福岡教育大学紀要』67号4分冊 (2018), 41.
- 7 同論文, 41-42
- 8 同論文, 43
- 9 吉田直子, 前掲論文, 188.
- 10 門野里栄子「霊のしわざ: 沖縄戦を語り継ぐ第三の声」『日本オーラル・ヒストリー研究』9号 (2013), 125
- 11 同論文, 136
- 12 『詳説 日本史 改訂版』(山川出版社, 2021), 366-367.
- 13 同書, 366

- 14 新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史 (改訂版)』(東洋企画, 2014), 1
- 15 同書, 302-307.
- 16 同書, 295-312.
- 17 同書, 313-324.
- 18 同書, 313.
- 19 同書, 305.
- 20 同書, 314.
- 21 吉浜忍, 林博史, 吉川由紀編『沖縄戦を知る事典: 非体験世代が語り継ぐ』(吉川弘文館, 2019), 47-48.
- 22 同書, 128.
- 23 同書, 12
- 24 318-319 頁に「国内唯一の地上戦についての問題点」として立項し、硫黄島の戦いを踏まえると沖縄は「国内唯一の地上戦」ではなく、「唯一の県民を総動員した地上戦」などという言葉遣いが使われるようになってきていることを説明している。また、それでも「唯一」「地上戦」という違和感のある言葉を人々が使おうとしている理由として、本土防衛のための「捨て石」となり、戦後の米軍支配から現在でも米軍施設が押し付けられることとなった沖縄の「地上戦」の悲惨さを強調するため排他的な言葉が使われてきたことを指摘している。
- 25 『琉球・沖縄史』319-324 頁には本文を書かずに5つのコラムが6ページかけて続いている、また『沖縄戦を知る事典』は28人の筆者により47個もののテーマが立項されて執筆がなされている。
- 26 とともに2023年9月14日訪問。
- 27 ひめゆりの塔, ひめゆり平和祈念資料館「展示・企画展|ひめゆり平和祈念資料館」『ひめゆり平和祈念資料館』, <https://www.himeyuri.or.jp/guide/> (2023年12月18日アクセス)
- 28 2023年9月16日のインタビュー。
- 29 こういった認識はいくつかの書籍においても見られた。例えば、原口泉『日本人として知っておきたい琉球・沖縄史』(PHP 研究所, 2022), 176 「住民が北部の山原へ避難していれば、住民犠牲は少なかったはずである」。

参考文献

- 沖縄県観光政策課「令和4年度修学旅行入込状況調査結果について」『沖縄県』, <https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/14737.html> (2023)
- 吉田直子「沖縄戦から何を学び、何を語り継ぐのか: 沖縄戦の記憶の継承活動にかかわる戦後世代の語りからの示唆」『東京大学大学院教育学研究科紀要』58巻 (2019), 179-189.
- 戸田靖久「アンケート調査から見た社会科系教職科目受講生の意識と社会科教育法の課題」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』23巻 (2015), 173-192.
- 林博史「沖縄戦における「集団自決」と教科書検定」『現代史研究』53巻 (2007), 65-70.
- 大城将保『沖縄戦の真実と歪曲』(高文研, 2007)
- 寺岡聖豪「歴史教科書の中での原爆問題」『福岡教育大学紀要』67号4分冊 (2018), 29-47
- 門野里栄子「霊のしわざ: 沖縄戦を語り継ぐ第三の声」『日本オーラル・ヒストリー研究』9号 (2013), 124-137
- 『詳説 日本史 改訂版』(山川出版社, 2021)
- 新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史 (改訂版)』(東洋企画, 2014)
- 吉浜忍, 林博史, 吉川由紀編『沖縄戦を知る事典: 非体験世代が語り継ぐ』(吉川弘文館, 2019)
- ひめゆりの塔, ひめゆり平和祈念資料館「展示・企画展|ひめゆり平和祈念資料館」『ひめゆり平和祈念資料館』, <https://www.himeyuri.or.jp/guide/> (2023年12月18日アクセス)
- 原口泉『日本人として知っておきたい琉球・沖縄史』(PHP 研究所, 2022)
- 大田昌秀, 佐藤優『沖縄は未来をどう生きるか』(岩波書店, 2016)
- 桜井厚「〈体験〉と〈経験〉の語り: 沖縄戦のオーラル・ヒストリーから」『日本オーラル・ヒストリー研究』5号 (2009), 73-97
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編」(2009)
- 文部科学省「【地理歴史編】高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説」(2019)